

対話

現場の先生のための 「進路指導」相談講座 を始める

— 第1回 —

取材・文／塚田智恵美
撮影／平野 愛

監修&アドバイス



追手門学院大学心理学部
教授
三川俊樹先生

追手門学院大学心理学部教授。カウンセリング心理学専攻。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了(学術修士)。スーパーバイザーなどとして活躍。2019年より日本キャリア・カウンセリング学会で理事・SV委員長を務める。

進路指導で悩む場面、ふと立ち止まる瞬間があっても、立場上、なかなか率直に相談できる相手がいなくて、お困りの先生方も多いはず。カウンセリングの領域では、カウンセラーが自身の担当する個別のケースについて、熟練した指導者と対話し、自身のカウンセリングの過程や問題点を振り返ることで、よりよいカウンセリングのあり方を模索する手法があります。この連載ではキャリア・カウンセリングの専門家である三川先生と現場の先生方の対話を通じて、現場の先生ご自身が「よりよい進路指導のあり方」を考えていく様子をレポートします。



CASE.1 公立高校 進路課 山崎先生(仮名) 40代前半

夏を迎えた高3の生徒Aくん。これまでは大学進学を目指していましたが、夏休み前の面談で突然、進路を変更したいと言いました。



高3の
生徒Aくん

先生、僕、やりたいことを見つけました。

ユーチューバーになります！

なので大学進学はどちらでもいいかな〜って思うんですけど、どう思いますか？
今から動画投稿のほうに専念したほうがいいでしょうか？

ユーチューバー???
……本気で目指してるんだよね？



山崎先生

華やかな世界に憧れる生徒が、毎年います。最近だと声優やお笑いタレントを目指したいという生徒も。もちろん「成功できるかどうかは本人次第」とは思いつつ、私自身、実際にユーチューバーがどのように生計を立てているのかもわからず、自分の知識も意識も追いつかないのが正直なところ。どのような指導がこの生徒にとってより良い人生を歩むことにつながるのか、悩みます。

成功するのは
一握りの世界。
生活していけるのか？

頭ごなしに
芽を摘んで
本人の幸せのために
なるだろうか？

大学に
進学しないと
就職も厳しい…

次ページではこのケースについて、三川先生と対話していただきました。

「生徒はどうすべきか」ではなく 現場の先生の「不安の正体」を紐解いていく

生徒がYouTuberを目指すことに、不安を感じるのですね。幸せな人生を送るのが難しくなるような気がするのでしょうか？



三川先生

短絡的に、一時の流行に乗ってはいないか心配です。長く続けられる仕事に就いてほしいと、つい思ってしまう。



山崎先生

「現実を伝えるべきだった」とあとで後悔したくない

山崎 教員の一言は重く思っています。私の願いは「卒業してからも、生徒には幸せな人生を送ってほしい」ということです。進路指導には答えがありません。私の発言がどのように、この生徒に響くのか不安です。
三川 山崎先生の生徒さんへの思いはよくわかりました。山崎先生は、生徒がYouTuber

「YouTuberを目指す」と「幸せな人生を送る」のが難しいような気がするのでしょうか？
山崎 やはり成功するのは一握り、の狭き門だと思えますから、もし生徒が失敗したら「あのとき無責任に背中を押さずに、もう少し現実を見させてあげればよかった」と自分が思うのではないかと。

三川 もし光も当たらずに失敗してしまったり、生徒さんの挫折にご自身が加担したような気がするのでしょうか？
山崎 そう感じてしまうかもしれません。

三川 ところで、なぜその生徒さんはYouTuberになりたいと言出したのですか？（気づき①）
山崎 なぜ…。そうですね。本人が好きだということもあるかもしれませんが、お金の面で成功しているYouTuberを見て憧れたのだろうと思うんですが。

三川 実際のところはわからない？
山崎 そうですね。そこまで踏み込んで聞けていなかったです。それよりも「保護者の同意が得られているか」が気になっていました。保護者も挑戦させたいというなら、教員に止める権利はないと思うので。

気づき①



「なぜ生徒がそう思った？」聞き取れていなかったことに気づきました。なぜか生徒が真先に「お金」と言ってくるであろうと決めつけていた。でもお金を稼ぐ方法は他にいくつもある。あえてYouTuberを挙げたところに、本人のこだわりや思いがあったかもしれません。

一時的な流行に乗ってはのちに大変な目に遭う？

三川 先行きの見えない不安定な仕事を目指せば、挫折する可能性がある。このことについて山崎先生はどのように考えますか？
山崎 …たとえ挫折したとしても、それを乗り越えて前向きでいられたらいいのかな。私たちは、高校卒業後の生徒たちの「先の人生」に寄り添うことはできない。だから、なんとか高校にいる間に、安心してこの先の人生も歩める道に導きたいと思いつているのかもしれないです。

三川 一度転んでも再び立ち上がる事ができる力があれば、その先の人生でたくましく生きていけるかもしれないですね。話は変わりますが、いろんな生徒さんを指導していて、山崎先生が「不安を感じない」生徒さんもいるんですね。

山崎 はい。よく考えてみると、冒険をしない無難な進路選択をしている生徒に対しては不安を感じていないかもしれません。過去の卒業生も選択してきた進路だと、私も卒業後の生活を想像しやすい。一方で、例えば高校の間勉強をしっかりとがんばって、指定校推薦で大学進学を狙えるのに、その恵まれた機会を捨ててでも一時的な

普通に進学・就職する生徒たちはこの先問題がないのか？

ブームに乗っかり進路を選択しようとしている生徒には不安を感じることがあります。
三川 一時的な流行に乗って進路を選択すると、それが続かなくなったときに、大変な目に遭うのではないかと心配されている。では、過去の卒業生と似た進路を選び、一見「進路に問題がない子」に見える生徒さんについてはどうですか。なぜ山崎先生は、その生徒たちのことは心配しないのですか？（気づき②）

山崎 …なぜ…？ やはり例年通りの進学先や就職先ですと、卒業生もたくさん周りにいて、何かあれば先輩に相談に乗ってもらえるでしょうし…。そういう安心感があるのかな。社会の変化や、終身雇用がすべてではないといったことも頭では理解しているのですが、気づかないうちに前例にはかり囚われていたかもしれません。

気づき②



「普通に進学や就職をしようとしている生徒のことはなぜ心配しないのか」と聞かれて、ハッとしました。その子たちは本当に大丈夫なのか？「問題のない進路」なんてないのですよね。これまで通りであれば安心というパターンに陥っていた。それでは変化に対応できないと気づきました。

卒業生の話から考える
本当に育てたい力とは

三川 一時的な流行に乗って挫折したとして、生徒さんはそのとき何を考えて、どのように対処するのでしょうか。

山崎 社会は猛スピードで変わっているので、個人的なネットワークの中で仕事を探すなど、新しい働き方や仕事の見つけ方に挑戦するかもしれないですね。

三川 では、その変化する社会の中で、どんな力を生徒さんが身につけていれば、この先幸せに生きていけるでしょうか。

山崎 対応力や、コミュニケーション能力。

三川 そのお考え、もう少し詳しく聞いてみたいです。

山崎 卒業生から聞いた話なのですが、就職した会社で良い成果を出せた生徒がいた。聞くと、自分の力ではなく先輩に助けてもらったからだというんですね。自分一人では乗り越えられない難題にぶつかっただけ、人に相談したり、人の力や知恵をうまく借りたりできる人柄も、大切な力の一つ。誰かに助けてもらった経験があれば、次は他の人に手を差し伸べることもできる。いい循環になるだろうと思います。

三川 山崎先生は先ほど、卒業後の生徒さ

将来挫折するかもしれない。
でも、そのとき生徒は「一人」か？

んの人生にご自身が寄り添えないこと、自分の目から離れたところで、卒業した生徒さんが一人で挫折する可能性があることに不安を抱いていましたが、**高校を卒業しても一人きりで生きていくわけではないのですよね。(気づき③)**

山崎 そうですね。働きながら周りの人たちに助けをもらうこともあるでしょう。そんな経験をすれば、次は生徒自身が困っている人に手を差し伸べられるかもしれません。仕事がつまみ、こたえ、挫折しようが、その生徒が経験することは、長い目で見れば無駄にはならないと思えてきました。失敗イコール人生の終わり、ではない。

三川 つまり、挫折したとしても、人に助けてもらって再び立ち上がり、それから新しい人生を歩み出してくれるのなら、それはそれで大事な経験になる。

山崎 はい、そう思います。何年も教育現場にいて、挫折して心が折れてしまう生徒たちも見てきたので、挫折を避ける傾向が自分にはありました。でも、挫折をきっかけに、人間関係の大切さに気づいたり、自分を支えてくれる存在と新たに出会えたりするかもしれない。そう考えると、生徒の話や話を聞くときに、その生徒だけでなく、生徒がどんな人たちと共に生きていきたいのかにも、目を向けてみたいと思います。

気づき③



「生徒は一人きりで生きていくわけではない」という言葉を聞いて、少しホッとするような気持ちになりました。社会に出て、生徒たちが新たな人間関係を築き、その中で支えられて生きていくのだという安心感。目の前の生徒のことはかり考えてしまい、視野が狭くなっていました。

三川先生との対話を終えて
現場の先生が振り返る

この対話で気づいたのが、自分が「教員の一言が、生徒の将来を変えてしまふ」と生徒の人生を背負いすぎていること。三川先生に話しながら「教員の一言で生徒の『進路』が決まることがあつても、生徒の『人生』は決まらない」と思えたのは、自分にとって良い変化でした。生徒の周りにはさまざまな人がいて、複雑に作用し合いながら生徒の人生が形成されていく。たとえ失敗したとしても、すべてが経験となって人生は続いていくのだと感じられました。

学校にきた推薦や求人枠を利用した生徒が、早々に中退・退社してしまうと、翌年話ができなくなることもある。だから、来年の生徒のためにも「とにかく卒業してほしい」「長く勤めてほしい」と考えていました。でも、生徒主体で考えれば、途中で辞めて新しい人生に行くという決断も仕方ないことなんですよ。生徒の表現したいことや、どのように社会と関わろうとしているか、これからはもっと聞いてみたいです。教員がどんな言葉をかけるかは確かに重要ですが、もう少し肩の力を抜いて、生徒本人のことを信じてみようと思います。

＼ 三川先生からのメッセージ /

「安心」の裏にある思い込みを知りましょう

対話の途中で私は、山崎先生が不安を感じない生徒さんの傾向について質問しました。元気で明るく、大学に進学する子は安心か？ それはひょっとしたら過去の例から導いた、先生の思い込みかもしれない。



この問いは同時に、山崎先生が不安を抱くことも実は思い込みなのではないかといった問いにつながっていきます。私たちは一定の思考の枠組みに沿って、これは安心、これは不安と判断していま

すが、社会も生徒も変化するなかで、その枠組みが本当に今、目の前の生徒に当てはまるのか、たびたび振り返っていく必要があるのではないのでしょうか。今回のような対話を、カウンセリング領域では、私のような専門家のスーパーバイザーが事例をおもちのスーパーバイザー（今回は山崎先生）に行う「スーパービジョン」と呼びます。しかしスーパービジョンの形でなくとも、先生ご自身が進路指導を振り返り、「なぜこのとき不安になったのか」「不安の裏に、どんな自分の価値観や課題があるか」といったことをご自身に問い、考えてみるのはいかがでしょうか。自ずと生徒との対話も変わっていくかもしれません。